

山科本願寺跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

山科本願寺跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は、今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたびアミューズメントセンター新築工事に伴う山科本願寺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます次第です。

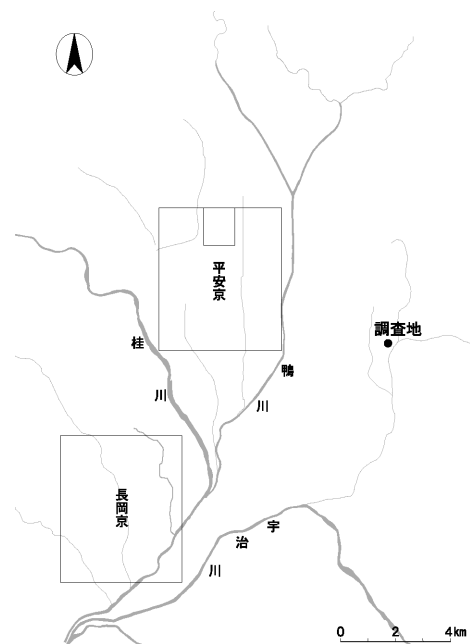
平成17年7月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 山科本願寺跡（12次調査）
- 2 調査所在地 京都市山科区西野山階町30
- 3 委 託 者 北口雅博
- 4 調査期間 2005年5月11日～2005年5月25日
- 5 調査面積 121m²
- 6 調査担当者 柏田有香
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「山科」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 13 遺 物 番 号 通し番号を付し、写真の番号も同一とした。
- 14 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子
- 15 遺 物 復 元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 柏田有香
- 18 編集・調整 児玉光世
- 19 本書は、2001年度から発刊してきた『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』を、今年度より書名変更したものである。



（調査地点図）

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺跡の位置と環境	1
(1) 位置と地理的環境	1
(2) 歴史的環境	5
(3) 周辺の調査	8
3 . 遺 構	11
(1) 基本層序	11
(2) 遺 構	12
4 . 遺 物	14
5 . ま と め	16

図 版 目 次

図版 1 遺構	1 第 1 面全景 (北から)
	2 第 2 面全景 (北から)
図版 2 遺構	1 石組み溝 4 ・ 暗渠 5 と土塁断面 (南東から)
	2 石組み溝 4 (北から)
	3 暗渠 5 (東から)
図版 3 遺構・遺物	1 北壁断割断面 (南東から)
	2 出土土器

挿 図 目 次

図 1 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)	2
図 2 既往調査位置図 (1 : 4,000)	4
図 3 山科古図 (一部、京都府立洛東高等学校所蔵)	6
図 4 昭和初期の山科西野地区 (昭和 11 年製版) (1 : 5,000)	6
図 5 航空写真 (南から 1997 年撮影)	7

図6	調査前全景（南から）	8
図7	作業風景	8
図8	調査区配置図（1：300）	9
図9	北壁断割断面図（1：60）	10
図10	第1面遺構平面図（1：100）	11
図11	第2面遺構平面図（1：100）	12
図12	石組み溝4・暗渠5実測図（1：50）	13
図13	石組み溝4出土遺物実測図（土器1：4、茶臼1：6）	15
図14	茶臼	15
図15	第2面整地層出土土器実測図（1：4）	15
図16	7次調査土塁断面	16
図17	土塁断面模式図	16

表 目 次

表1	山科本願寺関係略年表	3
表2	既往調査一覧表	5
表3	遺構概要表	13
表4	遺物概要表	14

山科本願寺跡

1 . 調査経過

今回の調査は、アミューズメントセンターの新築工事に伴うものである。当初、京都市埋蔵文化財調査センターにより試掘調査を実施し、焼土層を確認したことにより本調査に移行した。山科本願寺跡関連では、12次調査となる。

調査地は、国道1号線の北側に位置しており、山科本願寺跡の西辺にあたる。光照寺に残る「野村本願寺古御屋敷之図」や、京都府立洛東高等学校所蔵の「山科古図」(図3)などの古絵図をもとにした復元図によると、「御本寺」を囲う南北方向の土塁の東側斜面に該当すると推測された。なお、この南北方向の土塁は調査地の北側で東に折れ東西方向に向きを変える。この東西方向の土塁は一部が現在も残存している。

今回の調査地の西側では、直前に11次調査¹⁾が行われ、上部を削平された土塁の西側斜面を検出している。東側では、2次調査で多量の土師器皿が出土した石室や、建物跡が検出された²⁾。また、北側で今調査後に行われた13次調査³⁾では、土塁屈曲部の内側から炉跡、泉状遺構など、今回の調査結果とも関連が深い遺構がみついている。

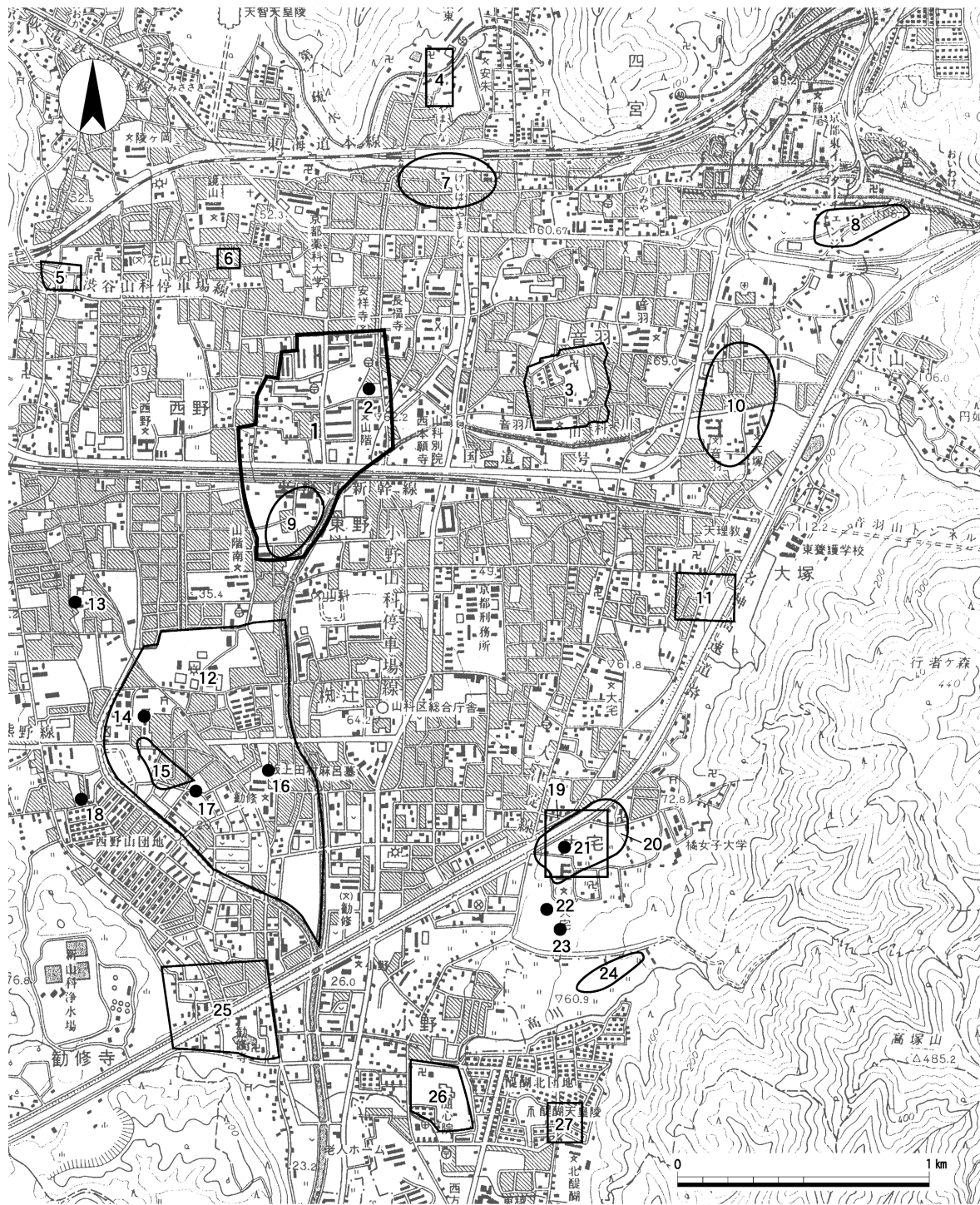
調査区は、南北方向の土塁の内側斜面から裾部を検出して、土塁の規模を推定できるように設定した。一部、内側平坦部分の状況を確認するために、北側ではトレンチを東に延長して調査を行った。2005年5月11日より重機掘削を開始し、同日中に人力掘削に移行して、第1面の土塁東側斜面と裾部を検出した。第2面の調査は、排土置き場を考慮して、土塁裾部のみ調査を行い、南北方向の石組みの溝と、それに続く暗渠を検出した。また、調査区北側で断割調査を実施し、土塁の構築方法と改修に関する情報を得た。記録写真と実測を行い、5月25日に全ての調査を終了した。

2 . 遺跡の位置と環境

(1) 位置と地理的環境

山科本願寺は、文明10年(1478)から造営が開始され、6年近くの歳月をかけて建設された。その位置は、山科盆地の中央やや西寄り、四ノ宮川と山科川の合流点の西側一帯で、山城国宇治郡山科郷野村といわれた地域である。この地は両河川によって形成された扇状地の先端部にあたる。扇状地は水田開発が困難な場所で、当時は未開発の地域であった。寺域に広い敷地を必要とした山科本願寺には、絶好の場所だったと考えられる。

さらに山科は、東山を挟んで京都盆地に近く、東海道・東山道・奈良街道が盆地内を通る、交



- | | | |
|---------------------|----------------------|-------------------|
| 1 山科本願寺跡 (室町) | 11 元屋敷廃寺跡 (奈良後期) | 21 大宅古墳 (古墳後期) |
| 2 蓮如上人墓 (室町) | 12 中臣遺跡 (縄文～室町) | 22 向山古墳 (古墳後期) |
| 3 山科本願寺南殿跡 (室町) | 13 花山神社古墳 (古墳後期) | 23 大宅廃寺瓦窯跡 (奈良前期) |
| 4 安祥寺下寺跡 (平安) | 14 稲荷塚古墳 (古墳後期) | 24 醍醐古墳群 (古墳後期) |
| 5 元慶寺境内 (平安) | 15 中臣十三塚 (古墳後期) | 25 勸修寺境内 (平安中期) |
| 6 四手井城跡 (室町) | 16 坂上田村麻呂墓伝承地 (古墳後期) | 26 随心院境内 (平安) |
| 7 安朱遺跡 (縄文、飛鳥～鎌倉) | 17 宮道古墳 (古墳後期) | 27 小野廃寺跡 (奈良前期) |
| 8 芝町遺跡 (縄文、弥生、奈良) | 18 中鳥井古墳 (古墳後期) | |
| 9 左義長町遺跡 (弥生～古墳前期) | 19 大宅廃寺 (奈良前期～平安) | |
| 10 大塚遺跡 (奈良前期～平安前期) | 20 大宅遺跡 (縄文) | |

図1 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

表1 山科本願寺関係略年表

応永22年 (1415)		七世存如の嫡子として蓮如が生まれる。
長祿元年 (1457)		蓮如、本願寺八世宗主となる。
文明3年 (1471)		蓮如、越前吉崎に坊舎を構える。
7年 (1475)		蓮如、越前吉崎御坊を去る。
9年 (1477)		応仁、文明の乱一応終わる。
10年 (1478)	1月	蓮如、野村柴の庵に居す。馬屋新造。(この年、大津近松にて越年。) (山科本願寺の造営始まる。)
11年 (1479)	1月	整地と作庭を始める。
	3月	向所を新造。
	4月	堺の古坊を移し、寢殿をつくりはじめる。
	8月	庭できる。
	12月	御影堂建設用材柱50余本など、山科につく。
12年 (1480)	1月	三帖敷の小御堂を作る。
	2月	御影堂造作事始め。
	3月	御影堂、棟上の祝。
	8月	ひわだ大工をよんで御影堂の檜皮葺はじめる。 仮仏壇を設けて、絵像の御影をうつす。 整地。
	11月	大津にあった根本御影を野村にうつし、山科ではじめて報恩講を催す。
	12月	吉野で阿弥陀堂用大柱20余本をあつらえる。
13年 (1481)	1月	寢殿の大門柱立。
	2月	阿弥陀堂の事始め。
	4月	阿弥陀堂棟上。
	6月	仮仏壇をつくって、本尊をすえる。
14年 (1482)	1月	御影堂大門の事始め。 阿弥陀堂の橋隠の柱を用意。 阿弥陀堂の四方の柱も立つ。 大門の地形をならす。 四壁の内に排水用の小堀を南北に掘る。 門前の両所に橋をかける。
	4月	冬のたき火所だった四門の小棟を改築。
	5月	寢殿の天井をはる。
	6月	阿弥陀堂の仏壇をつくりなおす。
	7月	仏壇に奈良塗師をやとってぬらせる。
	9月	仏壇ぬり終る。
15年 (1483)	5月	河内誉田の野中之馬という瓦師をよんで、大葺屋をつくり、 西山の土で瓦を焼く。
	8月	阿弥陀堂瓦葺きおわる。
長享2年 (1488)		加賀一向一揆おこる。
延徳元年 (1489)		山科南殿を造営する。
明応6年 (1497)		大坂石山坊舎造営。
8年 (1499)	2月20日	蓮如大坂から山科南殿に戻る。
	3月25日	蓮如没す、85歳。
大永5年 (1525)		九世宗主実如没す。証如、十世宗主となる。
天文元年 (1532)	8月24日	法華宗・延暦寺・六角氏の攻撃により焼亡。山科本願寺陥落。
2年 (1533)		証如、石山坊舎を本寺と定める。本願寺大坂へ移転。
5年 (1536)	7月	天文法華の乱。
元亀元年 (1570)		織田信長との石山合戦開始。
天正8年 (1580)		本願寺顕如、信長と和睦。石山本願寺退去。 その後、紀伊鷺森・泉貝塚・大坂天満と移転を繰り返す。
14年 (1586)		豊臣秀吉の朱印状をもって山科に寺領を回復する。
19年 (1591)		本願寺、京都七条堀川(現西本願寺)へ移転。
慶長7年 (1602)		東本願寺別立。このときから東西本願寺となる。
享保年間 (1716~1736)		東西本願寺がそれぞれ山科別院を建立。

(西川幸治「都市史の中の中世寺院」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年を一部改変)

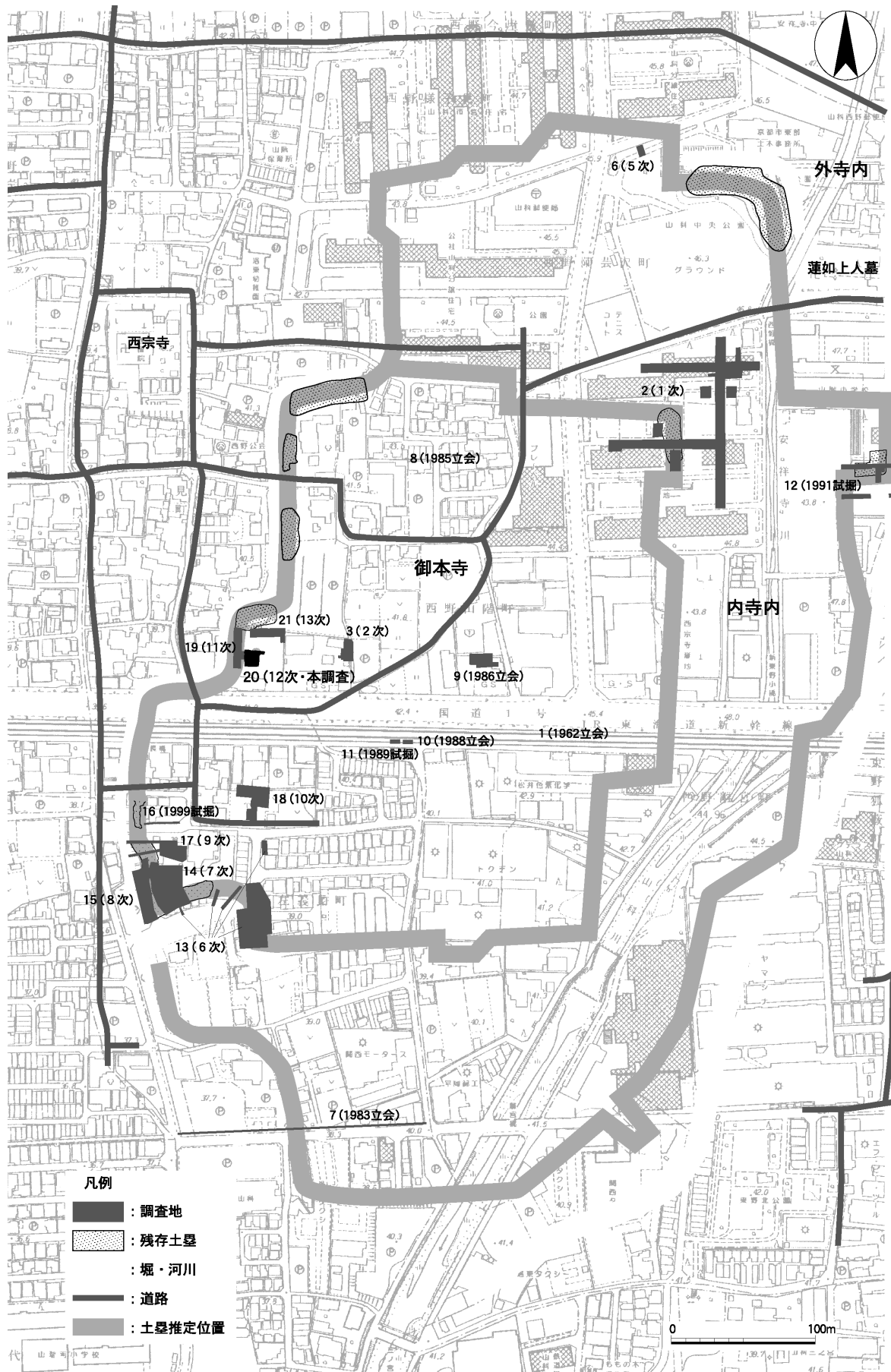


図2 既往調査位置図 (1 : 4,000)

表2 既往調査一覧表

No.	調査名・回数	所在地：山科区	調査期間	方法	概要	引用文献
1	新幹線立会	西野左義長町・山階町・離宮町	1962.8.9 ～11.11	立会	南北方向の石組溝、暗渠、南北方向の土塁	1
2	山科寺内町遺跡第1次	西野阿芸沢町・山階町・離宮町	1973.5.21 ～8.4	発掘	建物・鍛冶場、石垣、柵、南北方向の堀・土塁、	2
3	山科寺内町遺跡第2次	西野山階町	1974.10.9 ～11.3	発掘	石組溝、石室、庭園の一部	2
4	76RT-YG001第3次	西野今屋敷町9 (安祥寺中学校)	1976.11.17 ～11.30	発掘	旧耕土	3
5	76RT-YG002第4次	西野大手洗町20 (山階小学校)	1977.2.14 ～3.5	発掘	整地層	4
6	78RT-JN001第5次	西野阿芸沢町 (山科中央公園)	1978.10.30 ～11.13	発掘	攪乱	5
7	83RT-SW061	西野左義長町・東野舞台町ほか	1984.3.6 ～11.17	立会	東西および南北方向の堀、土壇群	6
8	85RT-SW054	西野大手洗町・今屋敷町ほか	1986.4.1 ～1987.5.16	立会	南北方向の堀と土塁、土壇	7
9	86BB-RT010	西野山階町12番地	1987.1.27 ～1.30	立会	東西方向の石組溝	8
10	88BB-RT005	西野山階町29	1988.5.30 ～6.2	立会	東西方向の石組溝	9
11	89BB-RT021	西野山階町29	1989.10.2 ～10.14	試掘	東西方向の石組溝	10
12	91RT-AH001	西野大手先町20 (山階小学校)	1991.8.2 ～10.18	試掘	土塁と堀の屈曲部	11
13	96RT-HG001第6次	西野左義長町16ほか	1997.4.20 ～7.10	発掘	東西および南北方向の堀、東西方向の土塁、建物、井戸	12
14	97RT-HG002第7次	西野左義長町23	1997.7.16 ～9.18	発掘	鉤型に曲がる土塁と堀、建物、井戸、鍛冶場、暗渠	13
15	98RT-HG003第8次	西野左義長町23-1、23-4	1998.8.17 ～11.9	発掘	南北方向の堀と土塁、暗渠	14
16	センター No.60	西野左義長町19-1ほか	1999.10.28	試掘	南北方向の土塁を測量	15
17	00RT-HG004第9次	西野左義長町19-1ほか	2000.5.10 ～6.30	発掘	建物、溝、暗渠、土塁基底部	16
18	04RT-HG006第10次	西野左義長町13-2	2005.1.17 ～3.18	発掘	東西および南北方向の堀、堀、柵	17
19	04RT-HG007第11次	西野山階町30	2005.3.1 ～3.15	発掘	土塁基底部の構築状況を調査	17
20	05RT-HG008第12次	西野山階町30	2005.5.11 ～5.25	発掘	土塁内側斜面と暗渠を検出	本報告
21	05RT-HG009第13次	西野山階町30	2005.5.30 ～7.2	発掘	土塁屈曲部、泉状遺構、炉、土取穴、暗渠を検出	17

通・物流の要衝であったことも、選地の大きな理由であったとみられている。

(2) 歴史的環境

山科盆地には、山科本願寺が成立する以前の遺跡も数多く分布する(図1)。旧石器時代の遺構は確認されていないが、中臣遺跡ではナイフ形石器や石核などの遺物が出土している。縄文時代になると、中臣遺跡で早期の押型文土器が出土している。やや南に離れるが日野谷寺町遺跡では中期から後期初頭の炉跡や土器・石器などが、晩期では、中臣遺跡や安朱遺跡で掘立柱建物や土器棺墓が出土している。また、中臣遺跡では晩期の土器棺墓と弥生時代前期の土器が同じ地区で見ついている。弥生時代に入ると、中期に中臣遺跡で方形周溝墓がみられる。さらに、後期か

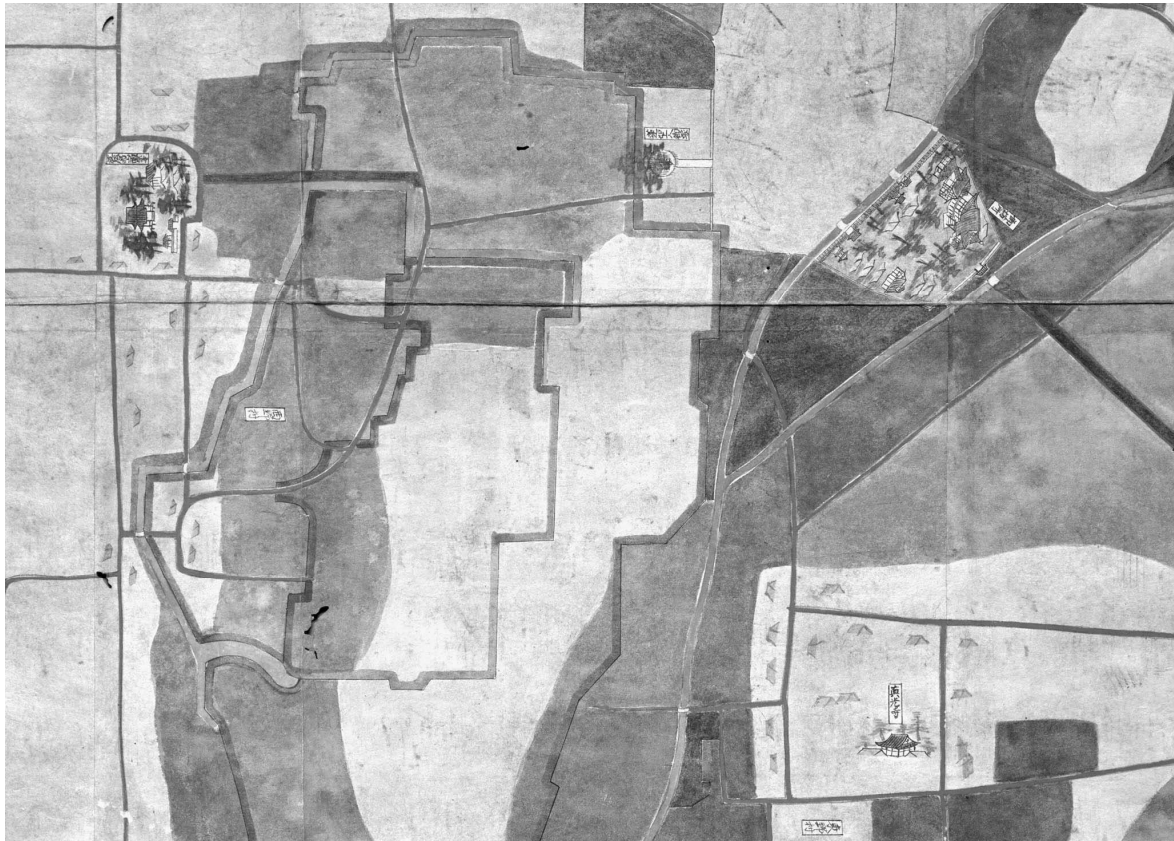


図3 山科古図（一部、京都府立洛東高等学校所蔵）

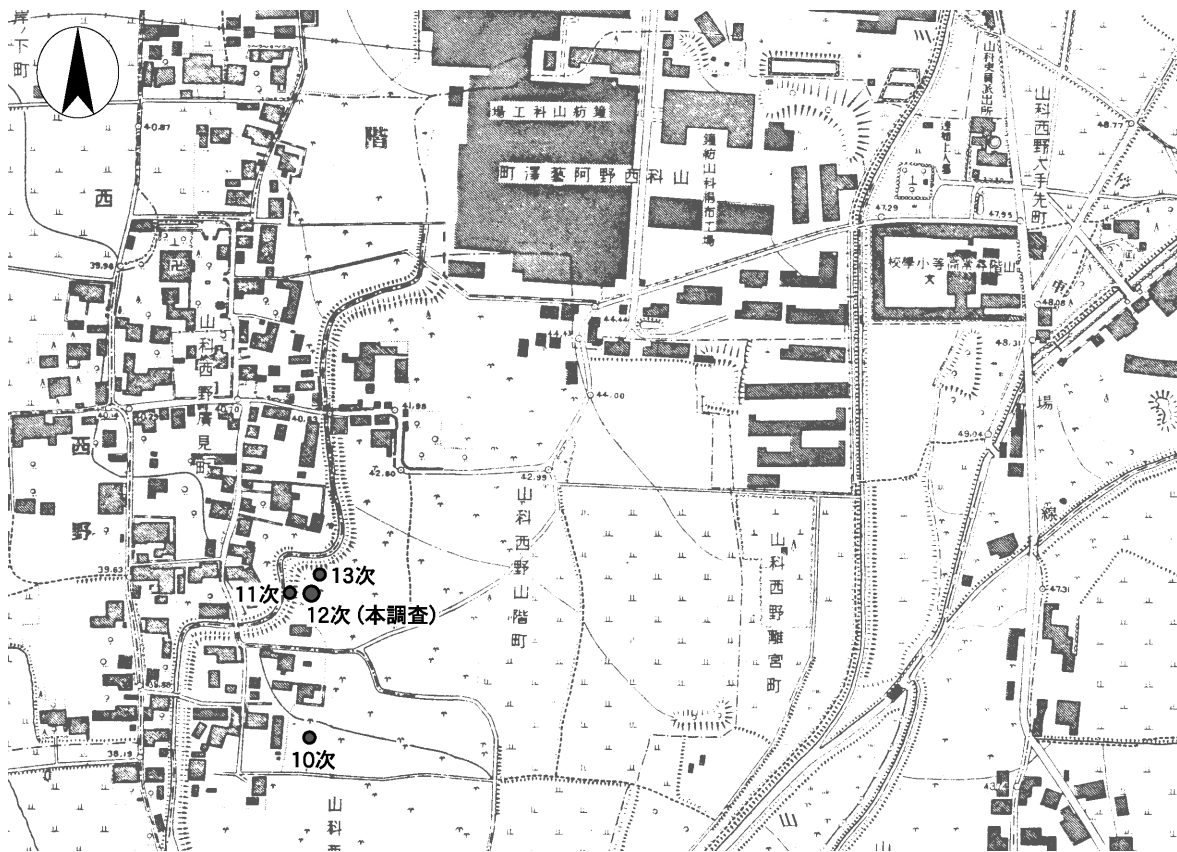


図4 昭和初期の山科西野地区（昭和11年製版）（1：5,000）



図5 航空写真（南から 1997年撮影）

ら古墳時代初頭にかけて中臣遺跡の規模が拡大し、多数の竪穴住居や土器が出土している。山科本願寺と重複する左義長町遺跡でも、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居と土器がみついている。古墳時代前期から中期にかけては遺跡の存在が希薄であるが、中期後半になり、中臣遺跡では木棺直葬の方墳が築造される。後期になると台地の斜面に沿って、中臣十三塚や稲荷塚古墳、宮道古墳、中鳥井古墳などの群集墳が築かれる。また、盆地を挟んだ東側の山裾にも大宅古墳、向山古墳、醍醐古墳群などの群集墳が存在する。それと関連して、古墳時代後期から飛鳥時代にかけては中臣遺跡で竪穴住居の数が増加する。奈良時代には、奈良街道に沿うように遺跡が形成され、金堂や講堂などがみついている大宅廃寺が建立される。大塚遺跡では集落跡がみついている。平安時代になると、山科は東海道・東山道が通る交通の要衝となり、中臣遺跡で集落跡がみついているほか、安祥寺下寺、元慶寺、勸修寺、随心院などの寺院が建立される。鎌倉時代には安朱遺跡や中臣遺跡で集落跡がみついているが、規模は小さく、これ以降、山科本願寺が造営されるまでの遺跡は希薄である。

その中で山科本願寺は、文明10年（1478）に本願寺八世蓮如上人によって造営が始められた。次々と「向所」「寝殿」などの諸堂が築造され、同12年には「御影堂」が落成している。同13年



図6 調査前全景（南から）



図7 作業風景

の「阿弥陀堂」の落成をもって、中心部分はほぼ完成をみる。その後も造作は続き、同15年に主要な施設を完成させている⁴⁾。寺域は、御影堂・阿弥陀堂・寢殿など主要建物のある「御本寺」、有力末寺の坊舎のある「内寺内」、門徒の居住区などがある「外寺内」の三つの郭から構成されていた。また、寺域外周に土塁や堀をめぐる防御施設を備えた環濠城塞都市であった。その規模は、南北1km、東西0.8kmに及ぶと推定されている⁵⁾。

山科本願寺は、寺内町の経済的發展に支えられ、大いに繁栄した。しかし、その隆盛も長くは続かず、造営52年後の天文元年（1532）8月に、管領細川晴元率いる法華宗徒・近江守護職六角定頼等の連合軍によって攻撃され焼け落ちた⁶⁾。

現在でも国道1号線の北側には土塁や堀の一部が残り、2002年に「山科本願寺南殿跡 附山科本願寺土塁跡」として国史跡に指定されている。

（3）周辺の調査（図2、表2）

山科本願寺跡では、これまで多くの調査が行われている。初めての考古学的な調査は、京都府教育庁による1962年の新幹線建設に伴う立会調査⁷⁾であった。その結果、遺構が良好に遺存していることが判明した。さらに、本格的な発掘調査が、市営住宅建設に伴って1973年から山科寺内町遺跡調査団によって実施され⁸⁾、多くの遺構や遺物が出土し、発掘調査の必要性が強く認識された。

以降、各所で継続的に発掘調査のみならず試掘・立会調査なども行われている。この結果、建物・石室・井戸・溝・鍛冶場など、寺域内の生活や生産活動に関連する施設の存在が明らかになってきた。また、堀や土塁・暗渠排水路の構造を確認することができたことにより、山科本願寺が計画的に造営されていたことが明らかになっている。各調査の概要を表2にまとめた。なお、今回は山科本願寺南殿跡の調査については触れない。

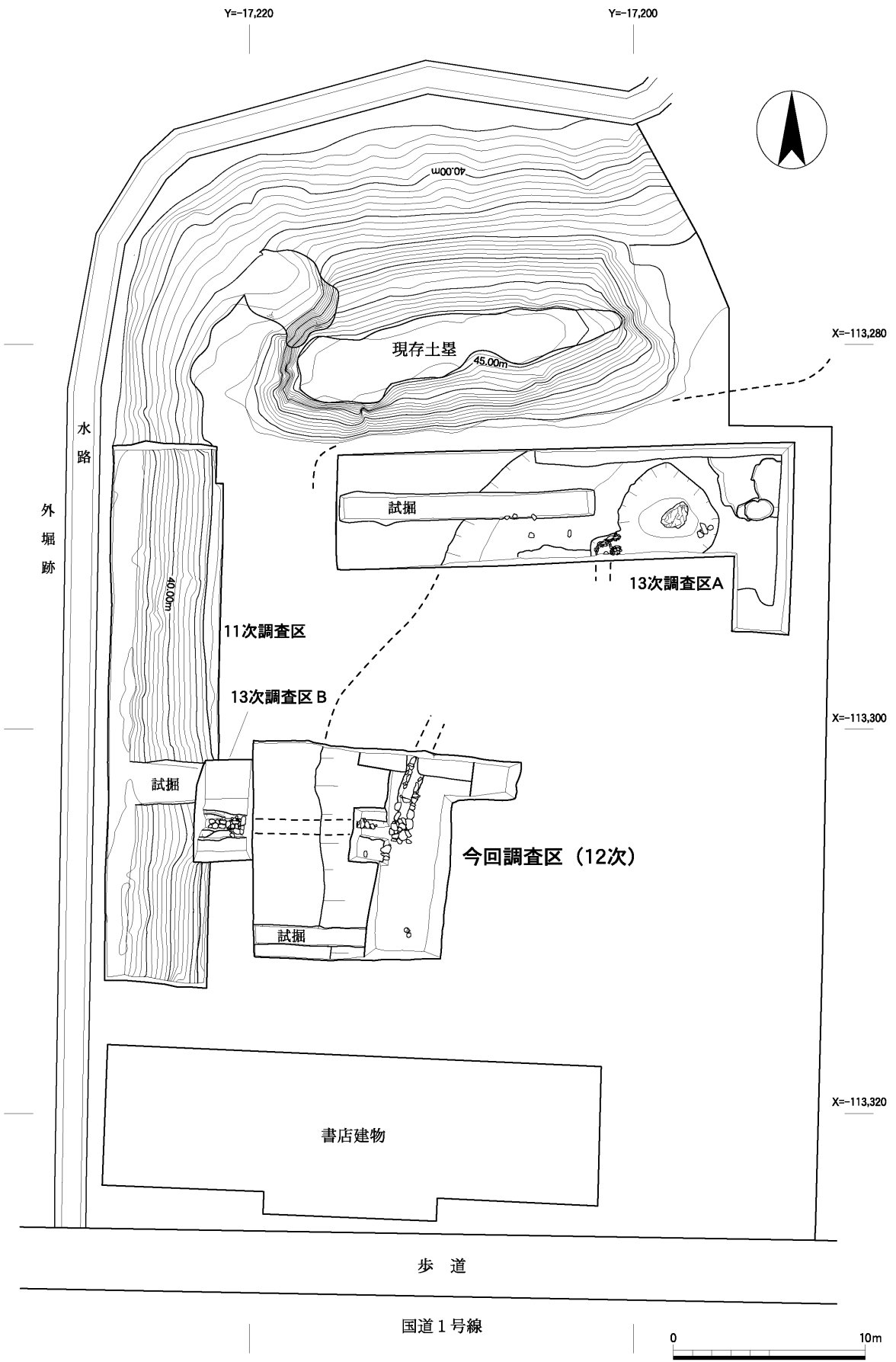


図8 調査区配置図 (1 : 300)

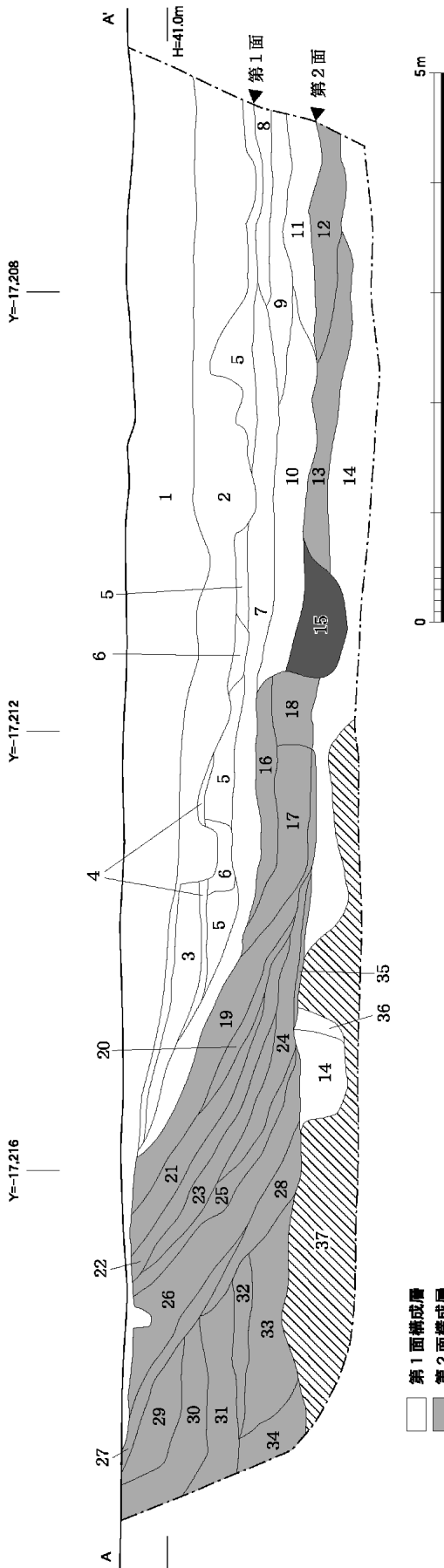


図9 北隣断面図(1:60)

- | | | | |
|----|--|----|---|
| 1 | 現代盛土 (駐車場整地層) | 20 | 10YR4/2 灰黄褐色 砂質極細～中砂 礫混じらず (19とベース同じ) |
| 2 | 2.5Y6/1 黄灰色 極粗砂混極細～細砂 鉄分多く含む 上層腐植 (旧表土) | 21 | 10YR4/2 灰黄褐色 砂質極細～中砂 2～3cmの礫少量混 (19・20とベース同じ) |
| 3 | 2.5Y6/3 にぶい黄色 砂質細～粗砂 5～10cmの礫詰まる | 22 | 2.5Y5/3 黄褐色 砂質極細～中砂 1～4cmの礫非常に多く混 |
| 4 | 7.5Y5/1 灰色 小礫混シルト～細砂 ゆるぐ土壌化 鉄分含 | 23 | 10YR3/2 黒褐色 極粗砂混極細～細砂 |
| 5 | 10YR5/6 黄褐色 極細～中砂 2～5cmの礫混 (近世遺物包合層) | 24 | 10YR4/2 灰黄褐色 粗～極粗砂混極細～細砂 3～5cmの礫少量混 |
| 6 | 10YR5/1 灰色 小礫混シルト～細砂 鉄分含 | 25 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色 極粗～小礫混シルト 1～3cmの礫少量混 |
| 7 | 5Y5/1 灰色 シルト～極細砂 やや粘質 (土層3 構築土) | 26 | 10YR4/2 灰黄褐色 細～粗砂 1～3cmの礫多く混 |
| 8 | 2.5Y4/2 暗灰黄色 極細砂 (整地層) | 27 | 10YR4/2 灰黄褐色 粗～粗砂 (26とベース同じ) |
| 9 | 10YR4/2 灰黄褐色 シルト～細砂 やや粘質2～3cmの礫少量混 (整地層) | 28 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粘質シルト～細砂 |
| 10 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 小礫混極細～中砂 (整地層) | 29 | 10YR3/2 黒褐色 極粗砂混中～粗砂 1～2cmの礫多く混 |
| 11 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト～極細砂 3～5cmの礫多く混 (整地層) | 30 | 10YR4/1 褐灰色 極粗砂混細～中砂 3～10cmの礫多く混 |
| 12 | 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト～極細砂 (整地層) | 31 | 10YR3/2 黒褐色 シルト～極細砂に10YR5/1 褐灰色シルトブロック多く混 |
| 13 | 10YR3/2 黒褐色 シルト～極細砂 5～10cmの礫混 粘土混 (整地層) | 32 | 10YR4/3 にぶい黄褐色 極粗～中礫混極粗砂 |
| 14 | 2.5Y4/1 黄灰色 極細～粗砂 1～3cmの礫少量混 | 33 | 10YR3/1 黒褐色 粗～極粗砂混極細～細砂 3～5cmの礫少量混 |
| 15 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色 小礫混細～中砂 土層多く混 (石組み溝4埋土) | 34 | 10YR4/2 灰黄褐色 粘質シルト |
| 16 | 10YR4/4 褐色 砂質シルト～極細砂 2～5cmの礫少量混 | 35 | 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質シルト |
| 17 | 10YR4/2 灰黄褐色 シルト～極細砂 3～10cmの礫詰まる | 36 | 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルトに14のブロック混 |
| 18 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色 シルト 粘土混 (石組み溝の裏込め痕跡か) | 37 | 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質シルト (地山相当層) |
| 19 | 10YR4/2 灰黄褐色 砂質極細～中砂 1～2cmの礫混 | | |

3. 遺 構

(1) 基本層序

調査地は、調査開始直前まで、駐車場として使用されており、さらにそれ以前は竹林であったことがわかっている。調査区の西側では、アスファルトと砕石直下が、上部を削平された山科本願寺の土塁構築土であった。この土塁構築土は、Y=-17,216ラインから緩やかに東に下がり、南北方向土塁の内側斜面となる。調査区のほぼ中央で、平坦面を形成する。なお、土塁部分の堆積については、遺構の項目で詳述する。調査区東側では、上から駐車場造成時の盛土が約50~60cm、竹林の腐植土と盛土が約20~30cmあり、さらにその下に17~18世紀の遺物が少量含まれる近世の遺物包含層が認められた。それより下が、山科本願寺の造営時期に該当する整地層である。この整地層は少なくとも3時期に分けられる。土塁構築土の下で確認した、断面図37層の山科本願寺

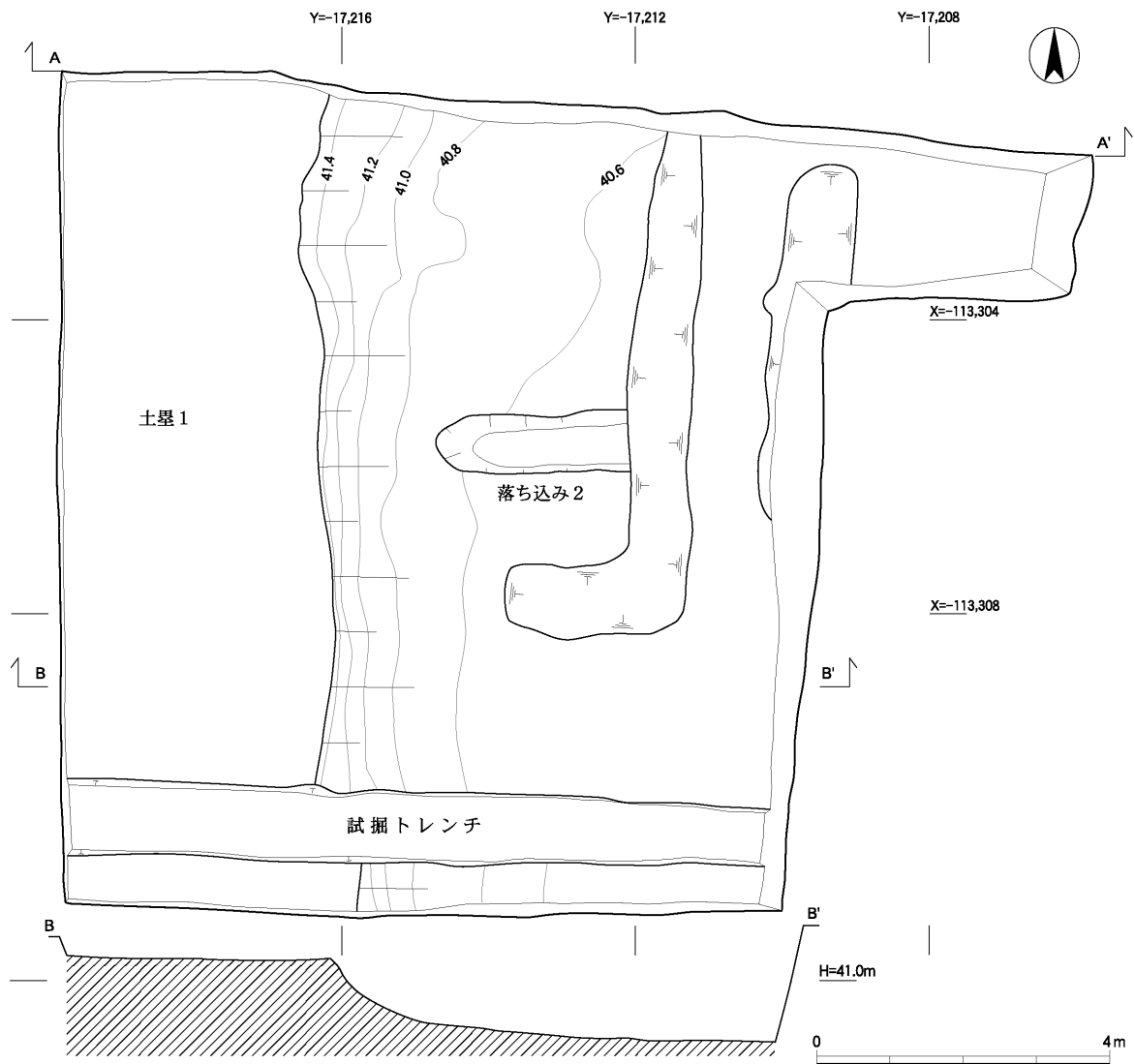


図10 第1面遺構平面図(1:100)

造営前の地山相当層にあたる均質な遺物を含まない粘質シルト層が土塁裾部付近で東に落ち込んでいる。東側では掘削深度の関係からこの地山相当層を確認できなかった。そのため、東側では14層の黄灰色礫混じり極細～粗砂の土で大規模に整地を行い、平坦面を形成している。その上の12・13層が第2面を形成する整地層である。さらにその上の7～11層が第1面を成立させる整地層で、7層は土塁部分も覆っており、土塁の構築土でもある。

(2) 遺構

2段階の山科本願寺の「御本寺」を囲う土塁と、それに伴う遺構を検出した。

第1面の土塁1は、第2面の土塁上に断面図7層(図10)の灰色粘質シルト～極細砂の土を盛り、拡張された土塁である。竹の根の影響で表面は凹凸が認められるが、上層の土と比較して固く締まる。駐車場造成により上部は削平されている。Y=-17,216ラインから緩やかに東に下がり、Y=-17,212ラインが、およそその裾部となる。傾斜角度は約20度、裾部の標高は40.6m前後である。この土塁の構築状況に関しては、断割断面で確認できた。西側の29～34層の土塁の核となる部分では、ほぼ水平に20～30cmの厚さの単位でブロック状に土を積み上げ、さらにその東斜面に

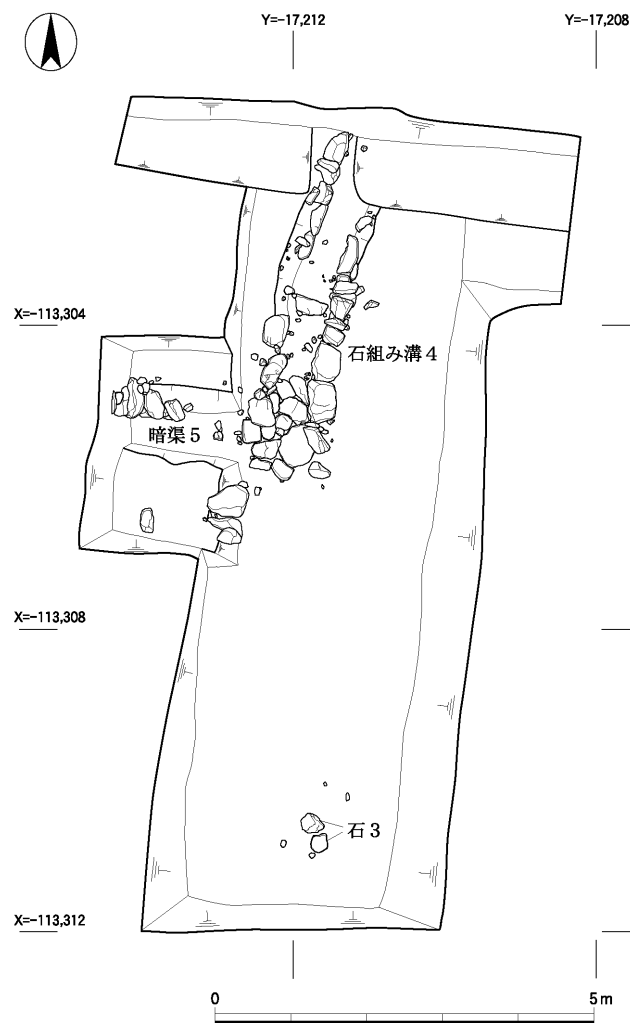


図11 第2面遺構平面図(1:100)

傾斜にそって10～15cmの比較的細かい単位で土を積み上げている。水平堆積、傾斜堆積ともに礫の多く混じる層と礫の混じらない粘質の土を交互に使用しており、明瞭な版築ではないが強く敲き締められている。調査区中央では、深さ約5～10cmの東西に長い落ち込み2が認められた。この下層に第2面の暗渠5があることから、その影響で地盤が緩く、陥没したものと考えられる。

第1面の整地層を除去して第2面の遺構を検出した。調査区南で検出した石3は直径約30cmの扁平な石が2石据えられたものである。形状から柱の礎石の可能性が考えられるが、調査区内では他に同様の石は見つかっておらず、性格は不明である。調査区北側では、南北方向の石組み溝4を検出した。調査区北端では約15度東に振れる。埋土は断面図15層のにぶい黄褐色小礫混細～中砂で、土師器皿等の破片が混じる。直径25～50cmの扁平

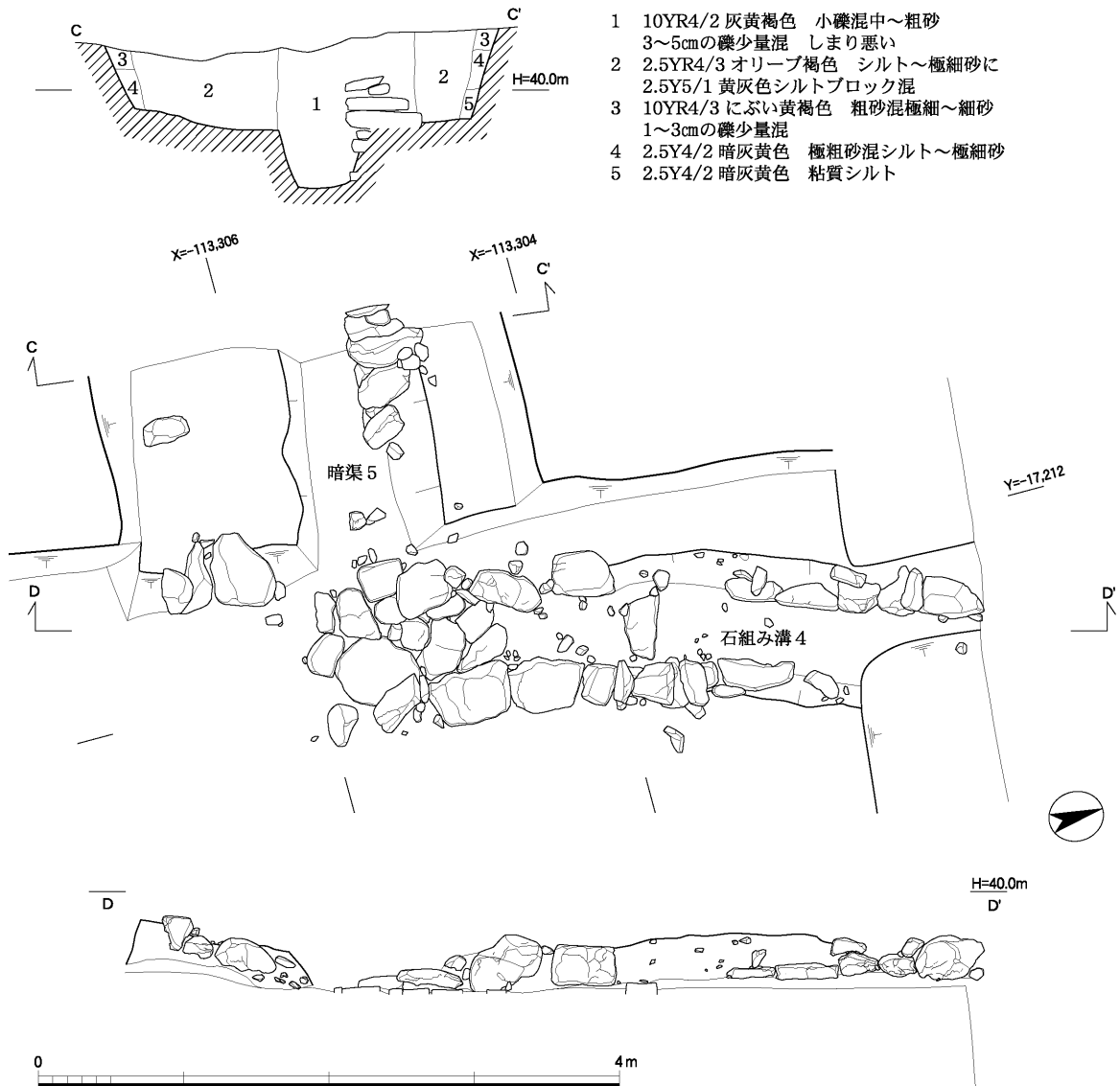


図12 石組み溝4・暗渠5実測図(1:50)

な石を底石として敷きつめ、その両側に直径25～50cmの石を一段から二段積み上げている。底石、側石ともに石が部分的に抜き取られているが、残存する溝の幅は側石を含めて約1m、内法では約0.4m、深さは約0.3mである。また、断面図18層の焼土混の均質なシルト層は、土塁構築土部の傾斜堆積や、平坦面部分の整地の水平堆積と異なり、石組み溝4の西側に带状に続くことから、西側側石の裏込めの可能性が考えられる。溝の底面は北から南に約2度下がる。調査区中央で西に折れ、暗渠5へ接続する。暗渠5も石が抜き取られており、抜き取りの際に転落したと思われる石と崩落した土を除去して検出した。検出した範囲では南側の側石と底石は全て抜き取られており、北側側石の一部が残存するのみであった。側石は直径25～30cmの扁平な石を4段以上積み上げている。残存する溝の幅は約1m、深さは約0.7mである。断面観察では、3・

表3 遺構概要表

時代	遺構
室町時代	土塁・石組み溝・暗渠
江戸時代	溝・落ち込み

4・5層の土塁構築土の水平堆積を切り込んでいることが確認できた(1・2層)。そのうち1層は礫が混じる締まりの悪い層で、石の抜き取り時の埋土と考えられる。2層は、暗渠構築時の埋土と思われ、このことから、一度土塁を盛り上げた後に、暗渠を構築したと理解できる。

また、北壁断割断面(図9)では13層の焼土層が認められた。断割の南壁ではこの焼土層は認められず、面的に拡がるものではない。鉄滓や鉄釘が混じることから、鍛冶関連の遺構の存在を示唆するものと捉えられる⁹⁾。石組み溝4は、この焼土層を切り込んで作られており、山科本願寺の造営に関連する作業が石組み溝4や暗渠5の構築に先行して行われていた可能性が考えられる。

4. 遺物

遺物は、遺物コンテナにして2箱出土した。近世の遺物包含層から出土した江戸時代以降の遺物が少量混じる他は、山科本願寺の存続時期に該当する遺物である。

石組み溝4から出土した(1~10)は、白色系の土師器皿である。全て胎土は精良、焼成は堅緻である。(1~3)は口径9~9.9cmの小型のもので、丸底の底部から体部が直線的に立ち上がる。口縁端部はやや強く横ナデする。(3)は、内面の底部と体部の境目が強い横ナデにより凹む。(4~7)は口径11.4~13.4cmの中型のものである。(4)は口縁部が強い横ナデにより外反する。(5)は、平底の底部から体部が内弯ぎみに立ち上がり、やや深い。(6)は体部が直線的に立ち上がる。(7)は、口縁端部の強い横ナデにより内面に稜が認められる。(8~10)は、口径14.8~16.4cmの大型のもので、3点ともに、平底の底部から直線的に立ち上がる体部を持つ。(8)は口縁端部を強く横ナデすることにより内面が凹線状に凹む。(10)は、内面の底部と体部の境目が強い横ナデにより凹む。これら土師器皿は、平安京編年の¹⁰⁾期古~中段階(16世紀前半)に位置づけられるか。(11)は、信楽産の焼締陶器播鉢である。復元底部径は12cmで、白褐色の色調を呈し、硬質である。4条1単位のクシ描きの播り目を持つ。(12)も、信楽産焼締陶器播鉢である。復元口径は30cm、にぶい橙の色調を呈し、軟質である。口縁は直線的に開き、内面には1条の凹

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代	土師器・瓦質土器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器	2箱	土師器15点、焼締陶器2点、輸入白磁1点	1箱	0箱
	丸瓦				
	鉄釘・鉄滓・茶白		茶白1点		
江戸時代	磁器・施釉陶器・焼締陶器	1箱		0箱	1箱
合計		3箱	19点(1箱)	1箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

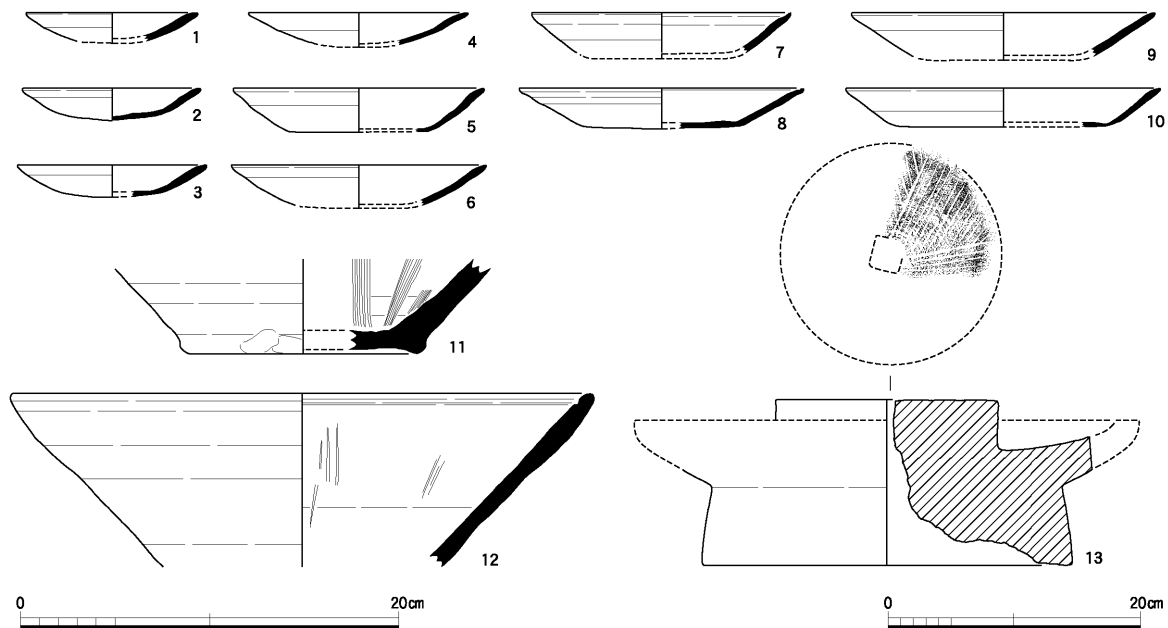


図13 石組み溝4出土遺物実測図(土器1:4、茶臼1:6)

線が巡る。磨滅のため単位は不明であるが、ヘラ描きの播り目を持つ。播り目間の間隔は広い。(13)は砂岩製の茶臼の下臼である。全体の1/4程度しか残存しないが、臼面の復元径は17.4cm、底径は29cmで、高さは13cmである。一辺約2.4cmの方形の軸穴が開き、受皿が付く。臼面はほぼ水平で、目は15本単位の6分画と考えられ、目の幅は約0.5~1mmで断面はV字形を呈する。外面は丁寧に調整されるが、内面の抉り部分には、加工時の鑿の痕跡が明瞭に残存する。



図14 茶臼

(14~19)は、第2面の整地層から出土した遺物である。(14~18)は、白色系の土師器皿で、(14)は口径9.1cmの小型、体部はやや内湾ぎみに立ち上がる。口径9.1cmの(15)は器壁が薄く、平底で体部は直線的に立ち上がる。(16)も小型で口径9.9cm、平底からやや内湾ぎみに体部が立ち上がる。内面の底部と体部の境目には強い横ナデにより凸線状の圈線が巡る。(17・18)は中型である。(17)は口径11cmで平底、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は強く横ナデする。内面の底部と体部の境目には強い横ナデにより凹線状の圈線が巡る。(18)も口径11cmで平底、内湾ぎみに立ち上がる体部を持ち、口縁部は強い横ナデにより外反する。内面底部と体部の境目は横ナデにより凹む。(17)と比して器壁は薄い。平安京編年の

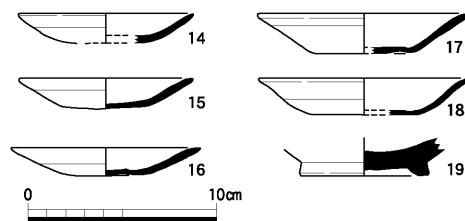


図15 第2面整地層出土土器実測図(1:4)

平安京編年の

期古段階頃（16世紀初頭）に位置づけられる。（19）は、底部径6.6cmの中国製白磁椀である。ケズリ出し高台で、残存する外面と高台内は露胎、内面の釉薬は薄い緑色を呈する。見込み部分には一条の沈線が巡る。12～13世紀代のもので、整地の際に混入したと考えられる。

5.まとめ

今回の調査では、2段階の山科本願寺の土塁と、石組み溝、暗渠を検出した。これらの遺構に関しては、隣接する11・13次の調査成果と関連が深いため、合わせて規模を復元したい。

土塁に関しては、今回第2面で検出した石組み溝4を内側の裾とした場合、土塁基底部の幅は約13.5m、西側（堀側）の傾斜角度は約35度、東側（内側）の傾斜角度は約20～25度である。上部は削平されており、高さは不明であるが、北側に残存する土塁の高さから復元すると、堀側の基底部からの高さ約7m、内側の基底部からの高さは約5.7mとなる。北側の土塁も削平されていることから、本来はそれ以上の高さがあったと推測される。また構築方法に関しては、まず堀側に水平に礫の多い層と粘性の強い均質な層を交互に積み上げ、土塁の核となる部分を構築し、さらにその東側斜面に傾斜に沿って同様に土を積み上げている。水分の透過層となる礫混じり層と、土が崩れるのを防ぐ粘性のある層を交互に積み重ねることで、より強固な土塁を築く意図が窺える。



図16 7次調査土塁断面

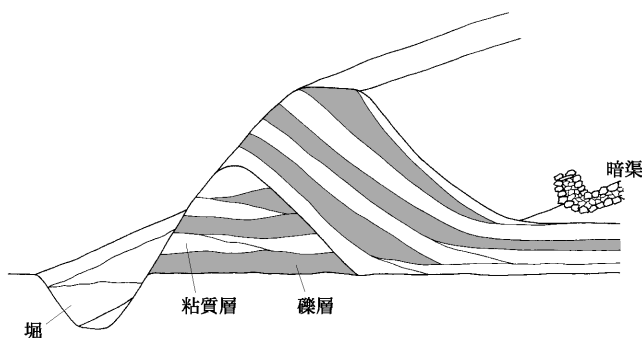


図17 土塁断面模式図

。これまでも7・8・9次調査などで、御本寺を囲む土塁の調査が行われており、同様の構築方法が確認されている¹¹⁾。土塁構築に関して、高度な技術と計画性があったことが推測できる。ただし、7・8次調査の土塁は斜面の最大斜度が45度と今回検出した土塁と比較して急角度であり、場所による作り分けが想定できる。

暗渠に関しては、13次調査B区¹²⁾で堀側の出口部を検出して、ほぼ全体の規模が判明した（図8）。12・13次調査合わせでの検出長は約9.5m、底石を南北に2石並べて敷き、側石は4～5段積み、天井石は2～3石を組み合わせて積んでいる。内法で幅約40cm、高さ60cmである。今回検出した入口部の底の高さは標高39.4mで、底石が抜き取られているため、本来はそれより5～10cm高かったと考えられる。13次調査で検出した出口部の高さは

標高39.1mで、入口から出口に向けて約2.5～3度の勾配である。また、入口・出口部ともに石が抜き取られ、土で埋まっている状況であったが、間は空洞になっており、土壘下部分では完存に近い状態であることも判明した。この暗渠と石組み溝は、位置関係からみて、13次調査A区で検出した泉状遺構からの排水施設と考えられる。暗渠は、これまでも7・8次調査、9次調査などで検出されている¹³⁾。今回の調査も含め、いずれも東から西に排水するもので、使用した石の大きさは30cm前後と共通する。7・8次調査、今調査の暗渠ともに土壘を一旦積み上げた後に、切り込んで暗渠を構築している。9次調査の暗渠についても、土壘上部が大規模に削平を受け、どの段階から掘り込まれたかは判断し難いが、掘形が確認されていることから、同様の構築法であった可能性が高い。土壘で囲まれた「御本寺」では、排水は最重要課題の一つであったと考えられ¹⁴⁾、土壘構築後に必要な箇所に暗渠を設けたものであろう。また、7・8次調査の暗渠は内法で幅30cm、高さ25cmで底石を敷き側石を1～2段積むものである。9次調査で出土した暗渠は、幅15cm、高さ15cmで、側石は1段積みである。今回検出した暗渠はこれらと比較して規模が大きい。それが、泉状遺構からの排水量に起因するものか、あるいは一連の庭園遺構としての景観を意識した可能性も考えられる。

さらに、今回の調査では、石組み溝や暗渠を壊して整地し直し、土壘を改修していることも明らかになった。また、断割調査では石組み溝や暗渠構築以前にも、鍛冶等を行っていた痕跡も確認でき、少なくとも3時期の変遷があることが判明したことは大きな成果である。今後はそれを踏まえて山科本願寺跡の調査を行っていく必要がある。

註

- 1) 10・11・13次調査については現在整理中であり、2006年3月に京都市文化市民局より『京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度』として刊行予定。
- 2) 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年
- 3) 前掲註1)に同じ
- 4) 草野顕之「創建時山科本願寺の堂舎と土壘について」『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館 2002年
- 5) 西川幸治「都市史の中の中世寺内町」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年
- 6) 『私心記』天文元年八月二十四日条
- 7) 杉山信三・堤圭三郎「山科本願寺」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』日本国有鉄道 1965年
- 8) 前掲註2)文献に同じ
- 9) 7次調査で鍛冶場が検出されている他、13次調査でも、土壘裾部で、炉跡と考えられる遺構を検出している。13次調査については前掲註1)に同じ。
近藤知子「山科本願寺跡2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 10) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

- 11) 近藤知子「山科本願寺跡 2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成10年度』 京都市文化市民局 1999年
吉崎 伸「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成12年度』 京都市文化市民局 2001年
- 12) 前掲註1)に同じ
- 13) 前掲註11)文献に同じ
- 14) 山科本願寺跡の北西、山科区西野八幡田町にある六兵工池公園内では、現在でも泉が湧き出している。数十年前までは、他にも泉が湧き出す箇所があったとの証言もあり、この近辺は元来地下水位が高かったことが推測される。

引用文献(表2)

- 1 杉山信三・堤圭三郎「山科本願寺」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』 日本国有鉄道 1965年
- 2 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年
- 3 堀内明博『山科本願寺跡 安祥中学校校舎新築に伴う発掘調査の概要 昭和51年度』51-4 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年
- 4 堀内明博『山科本願寺跡 山階小学校校舎改築に伴う発掘調査の概要 昭和51年度』51-33 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年
- 5 前田義明『山科本願寺跡 山科中央公園内防火用貯水タンク建設に伴う発掘調査の概要 昭和53年度』53-47 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1980年
- 6 平方幸雄「山科本願寺跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 7 百瀬正恒「山科本願寺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 8 百瀬正恒・吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』 京都市文化観光局 1988年
- 9 久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』 京都市文化観光局 1989年
- 10 久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』 京都市文化観光局 1990年
- 11 本 弥八郎「山科本願寺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 12 永田宗秀・近藤知子「山科本願寺跡 1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 13 近藤知子「山科本願寺跡 2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 14 吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成10年度』 京都市文化市民局 1999年
- 15 長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成11年度』 京都市文化市民局 2000年
- 16 吉崎 伸「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成12年度』 京都市文化市民局 2001年
- 17 現在整理中で、2006年3月に京都市文化市民局より『京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度』として刊行予定。

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	やましなほんがんじあと							
書名	山科本願寺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2005-3							
編著者名	柏田有香							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年7月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やましなほんがんじあと 山科本願寺跡 (じゅうにじちようき) (12次調査)	きょうとしやましなく 京都市山科区 にしのきんがいちよう 西野山階町30	26100	626	34度 58分 42秒	135度 48分 41秒	2005年5月 11日～2005 年5月25日	121㎡	アミュー ズメント センター 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山科本願寺跡 (12次調査)	寺院跡	室町時代	土塁・石組み溝・ 暗渠	土師器・瓦質土器・施 釉陶器・焼締陶器・輸 入陶磁器・丸瓦・鉄釘 ・鉄滓・茶臼				
		江戸時代	溝・落ち込み	磁器・施釉陶器・焼締 陶器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-3

山科本願寺跡

発行日 2005年7月29日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961